
まえがき

日本の古典籍は中国、朝鮮半島の文化を受け入れながら誕生し、その後も中国・韓国などとの文化的接触によってさまざまな変化・発展を重ねてきた。そのため、日本の古典籍の特質を把握する際には、東アジアの書物文化に対する理解が大変重要であり、それを十分に理解しなければ、東アジアの書物文化の関係性の中において認識すべき重要な事実が見逃されてしまうおそれが多分にあるものと思われる。一方において、日本の古典籍は中国・韓国の書物文化と多くの共通点を有すると同時に、日本の社会・文化環境のなかにおける独自の発展の歴史を持っており、多くの独特な特徴をも有していることからして、東アジアの古典籍の世界を考える際には、日本の古典籍の特質も十分に考えなければならない。しかしながら、現在の学術研究システムの中においては、研究対象の範囲が国や地域ごとに区分されることが多く、東アジアの古典籍の研究も、それぞれの国や地域を研究対象とする、異なる専門分野において行われており、その境界を越えることはなかなか難しいことと思われるのである。

一方、古典籍の内容は豊富で多様であり、近代以降の学問の細分化に基づいて形成された現在の研究システムでは対応しきれないことも多くある。例えば、同じ著者、同じ分野の古典籍でさえも、異なる学科や専門分野の研究対象になってしまうことがよく見られる。特に、人文社会系の学問と自然科学系の学問とが大きく分離したことによって、学問の全体像を把握することが困難となってしまっているのである。

以上のような限界や困難を乗り越えるためには、異なる国・地域あるいは現在の学術研究体系のなかにおける専門分野を超えての研究環境づくりが重要であり、東アジア古典籍の研究については、限られた

数少ない専門家以外の方々でも資料にアクセスできることや、国・地域や専門分野を超えた多分野の専門家の相互交流と、共同で研究を行う機会とが必要であると思われる。

以上のような認識のもと、2014年、国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」事業(略称「歴史的典籍NW事業」)の発足にともなう共同研究のなかにおいて、国内外の医学・理学・農学書の研究者とともに「アジアの中の日本古典籍—医学・理学・農学書を中心として—」をテーマとする共同研究を実施することとなった。「歴史的典籍NW事業」は、国文学研究資料館が中心となって、国内外の大学等と連携し、「日本語の歴史的典籍」に関する国際共同研究ネットワークを構築することを目的とする大型プロジェクトであり、その対象である「日本語の歴史的典籍」には、人文科学および自然科学系の諸分野のあらゆる日本古典籍が含まれており、各分野の研究の深化を図ると同時に、異分野融合の研究の促進も目指している。本研究はその目的を果たすための多くの研究チームの一つではないとはいえ、日本古典籍の重要な分野であり、しかも現代の社会生活にも密接な関係をもつ医学・本草学・理学・農学書に焦点を合わせ、資料調査・研究会・若手研究者を養成するワークショップなどのさまざまな研究活動を行い、中国・韓国・琉球・ベトナムなどの書物文化と比較しながら、その成立・流通・享受などの過程における諸問題を考察し、内容と形態の両方から日本の古典籍の特徴について再検討を行ってきた。2016年4月より、本研究は人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開」の一つのユニットとして再編され、研究活動を続けることとなった。そしてその成果の一部として今回の論文集を出版することとなった次第である。

上記のように、今回の論文集の内容は多くの分野にわたるものであるため、以下、読者への案内として、各部の論文の順序に従い、各論文の内容を簡単に紹介しておきたい。

第一部においては、医学関係の論文7篇を収録した。真柳論文は、

撰者が長年にわたって行ってきた日中韓越の古典医学書の調査の蓄積を生かし、日中韓越の古医籍データを中心に定量分析を行い、医書流通の体系化を目指した労作であり、アジアにおける古医籍の流通状況を把握するための重要な総論である。浦山論文は、南北朝時代の禅僧有隣(有林)の医学書『有林福田方』ゆうりんふくでんほうについての研究である。本書は当時の日本の医学水準を示していると同時に、元代以前の中国の医書を多く引用しているため、日本に伝来した中国の医学文献を知る上での貴重な資料でもあるものと思われる。撰者は本書の現存諸本を精査した上で、復元問題に取り組み、また、内閣文庫本『福田方』巻十三に該当する『悲田方』の諸写本を取り上げている。梁論文は、撰者が長期にわたって調査してきた『傷寒金鏡録』をはじめとする多くの舌診書の内容と中国および日本における流通状況とを概観したものであるが、特筆すべきこととして、作者はこれらの舌診書を参考にして、保健・医療の現場において健康状態を観察するためのデータとして導入するという、実践的なプロジェクトにも携わっていることである。朴論文は、韓国の『東医宝鑑』とういほうかんの東アジアにおける流布と影響とを考察したものであり、特に中国の歴史書・文学作品のなかでの引用例を多く見いだしている。このことにより、医学を超えた本書の影響を窺うことができるのみではなく、近世における東アジアの書物を通しての情報伝達と文化交流との実態を知る上での好例であると言えるだろう。梁・李両氏の論文は、朝鮮通信使の来日の際に残された夥しい筆談資料の中の医学関係の文献を調査し、医学に関する筆談資料を中心に、当時としては極めて貴重な、直接の交流を通じての医学情報の交換と討論とについて、医学の専門的な立場から分析を行った論考である。金論文は、撰者による崔漢綺の関係文献の探索の経緯を紹介し、朝鮮にはじめて西洋医学を紹介したとされる『身機踐験』に関する当時の認識を述べている。小野論文は、清末の漢訳西洋薬学書に記述されている医療用アヘンの効用の記述に対する中国知識人の受容を論じたものであり、漢文西洋薬学書を取りあげることで、アヘン問題という中国史研究上の重要なテーマに対して、新たな視点からのアプローチ

を試みたものである。

第二部においては、天文・暦算学・地理学などの西洋科学知識の受容および地図・名所絵の作製に関する4篇の論文が収録されている。吉田論文は、イエズス会士フェルベーストが北京の天文台に設置した天文観測機器の解説である『新製靈台儀象志』^{しんせいれいだいぎしょうし}について、江戸時代における本書の受容を、テキストのみならず図に注目して跡づけようとした試みである。祝論文は、時憲曆書の抄録書である『躰躰子曆鏡』^{ごうごうし}を例として、明清時期における原書から抜粋抄録した出版物、すなわち「文抄」現象を考察し、文抄類テキストを検討することの意義としては、人々がどのようにテキストを読み、抜粋、出版し、さらにそれを読むという行為を経る循環に反映された知識社会の歴史を探ることができるとあると指摘している。任論文は、朝鮮と日本との対比を念頭に、近世の学術的展開における重要事項のケーススタディとして、朝鮮科学史の代表的人物である18世紀の実学者洪大容が、西洋人宣教師と直接面談し、その際の様子を記録した著作である『劉鮑問答』の内容を検討したものである。大澤論文は、江戸時代における中国製地図の受容および日本において作成された中国地図を概観しながら、葛飾北斎『唐土名所之絵』の製作背景と内容の特徴を分析し、その刊行から江戸時代の庶民への影響にいたるまでの考察を行っている。

第三部においては、中国と日本の博物学・本草学に関する4篇の論文を収録した。陳論文は江戸期における中国の『詩経』名物学に関する著作の出版および、日本人による『詩経』名物学についての研究書を概観し、この時期における、本草学・博物学の発展と盛行とを伴った『詩経』名物学の受容および発展について考察を行ったものである。廖論文は、明代の方以智の著作である『通雅』『物理小識』を例として、彼の西洋知識と科学思想の受容の方法とを分析し、西洋から伝わってきた博物知識と実証精神とともに、異国情緒と猟奇的心情も、その知識体系を構築する際の推進力となっており、このことがまた、中国、ひいては東アジアにおける知識人が博物学の知識体系を構築する際における重要な課題であると指摘している。高津論文は、中国王朝、薩摩

藩、江戸の本草学者、琉球の医学者によって異なる背景、異なる欲望のもとに行われ進展していった南西諸島の生物相の調査、研究についてまとめたものであり、同一の研究対象に対するそれぞれの視角の違いを指摘している。久保論文は、熱性マラリアの特効薬の発見によって2015年にノーベル医学生理学賞を授与された中国の女性科学者、屠呦呦氏の研究によって大いに注目された「青蒿素」のラテン名と和名・漢名の対応などに関する名物学的研究であり、古典籍に記されている薬物を応用しようとする際においては、その薬物を現代の定義（ラテン名や薬用部位など）で置き換えて読むことをせずに、一つの名称が内包しうる近縁種なども考慮に入れて研究する必要があると指摘している。

第四部においては「人と書物」として、作者および書写・出版・収蔵・享受といった、書籍の生産と流通とに関する4篇の論文を収録した。福田論文は、江戸期日本のマルチタレントと称すべき平賀源内の伝記的事実について、『平賀実記』を中心として検証を行い、その結論として、源内伝記研究に課せられた課題は多く残されており、再検討が必要であると強調している。平野論文は、江戸期の洋学者・柴田収蔵の『柴田収蔵日記』を手掛かりとして、そこに登場する書物の取り扱いや、本屋を媒介とした知識吸収の諸相を見ていくことによって、幕末期における学問のあり方を示そうとしたものであり、その蘭学・博物学に関する知識の入手経路を、浅草(日本橋)の本屋たちを中心として、探索したものである。清水論文は、19世紀初頭の信濃の地方知識人である伊藤忠岱について、その書写活動から地方知識層の書物収集、およびそれらを巡る交流を探ったものであり、個人を軸として知の取得の様相を明らかにしている。鈴木論文は明治十年代の医学書専門の本屋である英蘭堂島村利助と東大医学部の足立寛と関係を軸として、大学講義書の「正規」版の出版を西洋医学教育システムの展開のなかで捉えたものである。

以上における簡単な紹介からも分かるように、本論文集の内容は東アジアの古典籍と日本の書物文化との関係を意識しつつ、医学・科

学・博物学などの分野の古典籍を研究したものであり、個別の論文においては医学書、天文暦算学などの理学書あるいは本草学、博物学の書物を扱っているものの、執筆者たちはそれぞれの専門分野を超えて、日本の古典籍の特徴および東アジアの古典籍の全体像に強い関心を有しており、今回の共同研究を通してそれぞれの専門分野における新しい知見を提示すると同時に、書物の成立、抄写と出版、収集と享受など、東アジアの古典籍に関しての共通する問題へのアプローチや、人と書物の移動と交流に伴う知識と情報の伝達など、国・地域・専門分野を超えた新しい視点からの考察も見られるものと考えられる。当初に目指したことから考えるならば、本論文集の内容はわれわれの目標に至るまでなお遙かな旅程があるものと思われるが、これを新たな出発点として、さらに努力を重ねていきたいと考えている。博雅の叱正を期待する次第である。

編 者

目次

まえがき (1)

第一部 医学

日中韓越の医書流通と医学体系の形成 真柳 誠 3

『福田方』『悲田方』の構成と復元の可能性 浦山きか 22

日本における中国舌診書『敖氏傷寒金鏡録』の受容 梁 嶸 49
(黄昱訳)

東アジア伝統医学の真髄 朴 現圭 74
——朝鮮許浚の『東医宝鑑』 (黄昱訳)

国立公文書館所蔵の朝鮮通信使の医学筆談 梁永宣・李敏 91
(小野泰教訳)

崔漢綺が読んだ西洋医学書 金 哲央 113
——Hobson(合信)の医書と崔漢綺の『身機踐験』

清末の漢文西洋薬学書における 小野泰教 129
アヘンの記述について

第二部 科学

『新製靈台儀象志』の受容……………吉田 忠 145

テキストの鏡影……………祝 平一 175
——抜粋本と清初の曆算学……………(高津 孝訳)

18世紀朝鮮の実学者洪大容の『劉鮑問答』……………任 正燮 197
——西洋科学知識受容の一断面

葛飾北斎『唐土名所之絵』と中国地図の受容……………大澤顯浩 216

第三部 博物

経学註釈と博物学の間……………陳 捷 245
——江戸時代の『詩経』名物学について

近世中国知識人の博物学の再構築……………廖 肇亨 265
——方以智『通雅』と『物理小識』を中心に……………(千賀由佳訳)

交錯する視線……………高津 孝 279
——南西諸島の博物学

青蒿と黄花蒿の名物学的研究……………久保輝幸 303
——ラテン名比定の問題を中心に

第四部 人と書物

平賀源内伝の再検討 ——『平賀実記』を中心に	福田安典 325
洋学者・柴田収蔵と江戸の本屋	平野 恵 343
近世後期における地方知識層の書物交流 ——伊藤忠岱の書写活動を中心として	清水信子 381
医籍専売書肆英蘭堂島村利助について	鈴木俊幸 418
あとがき	433
執筆者一覧	435